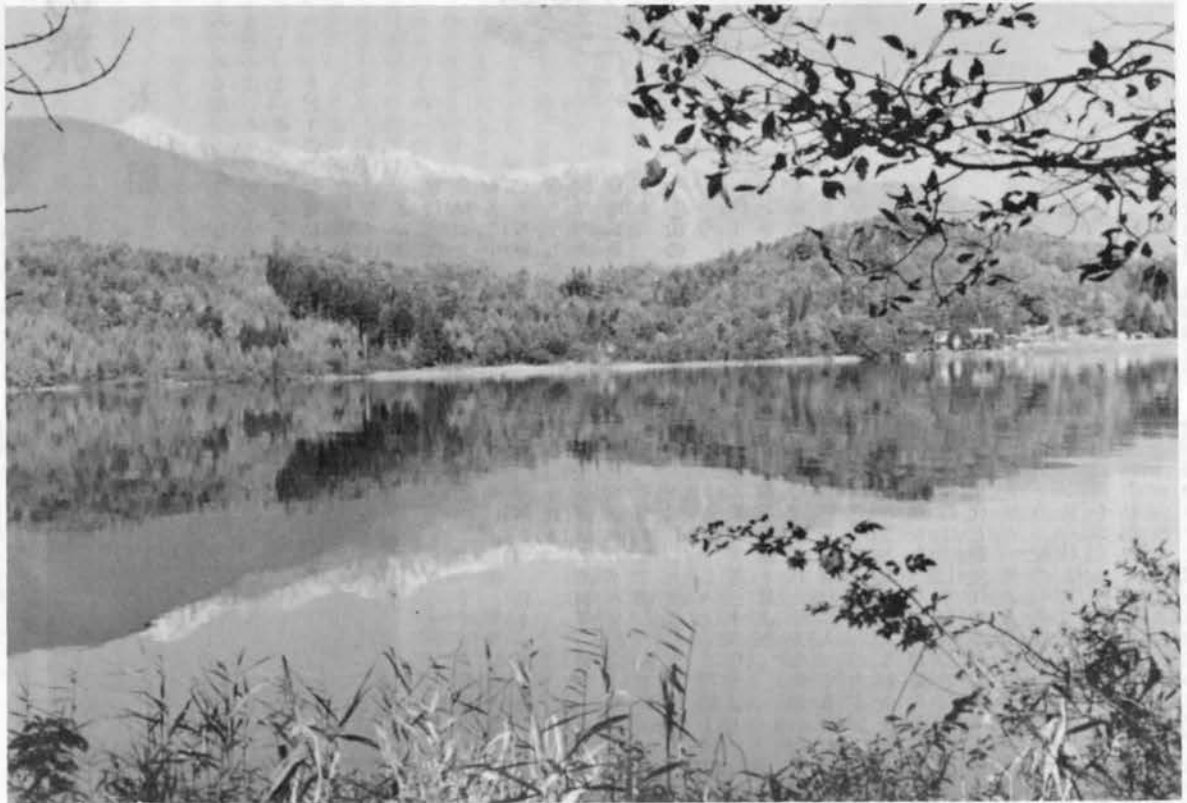


山と博物館

第21巻 第10号 1976年10月25日 大町山岳博物館



雪のきた白馬三山と青木湖 (10.22撮影)

撮影 丸山 雅弘

千国街道と私

街道に対する呼び名は、定まった一つだけのものでなく、幾つかの名前を持つのが普通である。千国街道の場合も例外ではなく、糸魚川街道・仁科街道・松本街道・北国街道脇往還等の名で呼ばれてきた。

由来、道の名は目指す目的地の名をもって呼ぶのが慣わしである。善光寺に向かう道は「善光寺道」であり、伊勢に向かえば「伊勢道」である。従って「糸魚川街道」という呼び名は、松本・大町を中心とする信州側でのものであり、「松本街道」というのは、糸魚川を中心とする越後側での呼び名であった。信州側にある昔の道標は、すべて「越後道」としてある。幾山河を経て辿りついた越後の国への道であつてみれば極く自然の呼び名であつたといえよう。

「千国街道」という名が言い慣わされて、最も現代におよんでいたのは、安曇野の西部山麓地帯ではないかと思う。道は時代によって所を変え、姿を変えるものであるが、この西部山麓地帯は千国古街道時代の面影を残し、呼び名も語り伝えられて来たものと思われる。今日、松本から糸魚川に通ずる旧街道の名を「塩の道」とか「千国街道」とか呼ぶことに、ほぼ定着した観があるけれども、私は現代的意義や歴史的背景を考えて、この名が最も適当ではないかと思つている。

街道も峠も戦後交通機関の著しい発達によつて、質的に大きく変貌した。戦前においては少なくとも、街道や峠は物見遊山の場所ではなかつたのである。道に昔を偲び今を楽しむものとしての要素を求めることなど、戦前は思いもおよばなかつたことであつた。

「千国」という地名は昔は現在のような、単なる小字名ではなかつた。昔に遡れば遡るほど、広範な地域を指して言い、街道概要の地を占めたところであつた。「千国道」というのもまた由緒ある名であつたのである。

(「白馬小谷研究」主宰田中欣一)

北小谷地質見学の旅

木船清

「理由なくして存在はない」と云います。見知らぬ道端で、一塊の岩や崖くずれの片偶に、その過去をたずね知ることは楽しいことでもあります。道路が開けた最近では昔より、自

然をみつめる機会が少なくなった気がします。北安曇の生いたちを知る上で、今までに公表されていない車で行ける北小谷周辺の地質見学ルートを記すので参考にしていただき、自然理解の一端にしたい。ければ幸いです。



図1

①山のおなかを見よう

図1の①地点は外沢トンネル工事の土砂捨て場です。平倉山のおなかにあたるこれ等の土砂は、平倉山凝灰角礫岩と呼ばれる昔の火山噴出物です。含まれる角礫は、暗灰色〜黒色の緻密な安山岩

口、白色の方解石が脈状に入った岩石がハ、青緑色でガラス状2cm〜5cm巾の碧玉以上の礫をうめる同質の安山岩、火山砂などが見られます。



又こゝで見られる地形としては、姫川によつてできた対岸の来馬層の侵食による崖と来馬部落の地すべり地形口、南西方向に見える神田山の崩落崖(写真1)

この大崩落は明治44年に発生、その泥流は姫川に比高60mのダムを形成、せき止められた水は、下里瀬まで達し、舟で交通したがその後ダムが切れて大洪水となり、現河床下で栄えていた宿場と広々とした美田を流失させた(図2)こゝでは方解石の方が安山岩より後で貫入したことが観察よりわかります。又附近には鏡肌をもつた岩片が見られ、この辺の地塊運動のげしさを示しています。

②方解石の脈を見よう

金網で保護された平倉山の溶岩が露頭の右端に、方解石が脈状に入っているのが見られる(図2)こゝでは方解石の方が安山岩より後で貫入したことが観察よりわかります。又附近には鏡肌をもつた岩片が見られ、この辺の地塊運動のげしさを示しています。

③中生代と新生代のふれ合い?

光明沢橋から見える滝の左岸で、来馬層の粘板岩と第三紀の石英安山岩が断層で接しているのが見られます。下に黒色の粘板岩があり上に滝をつくる石英安山岩が分布、その間には黒色の粘板岩の破片やその風化物、その上に全体が白色に風化され粘土化した石英安山岩が破碎された間をうめています。なお安山岩の一部には鏡肌のみられ、全体として断層

関係と判断されます。又この白色の粘土の中から1mm〜5mm位の石英粒がどつきり採集できます。

④断層の新旧を決めよう

小谷橋左端20m地点では次の事が観察できます。一つは川岸にある礫岩です。礫は1cm位の円礫でチャートが主に頁岩、石英岩等です。これ等の礫を運んで来た川はどんな川だったろう。川の上流にはチャートや頁岩の山があり、遠い旅で礫もすつかりまるくなり、小さくなったのかな?なんて考えるヒントを与えてくれます。礫岩の上方の崖に断層が見られます。よく調べて見ると(口)の断層の方が新しいことがわかります。この地域では多くの断層が交つて居るので、どの動きが新しいのか注意して観察しましょう。

⑤地層の表面はどうなっているのかな

断層の通っている所や地層がもろい所は崖くずれが起りやすい所です。この灰青色中粒炭質物を含む砂岩と鱗状にはげる泥岩の互層では、風化に対しては砂岩の方が強いので砂岩層の表面が洗い出されます。(写真2)これからN60°W・40°の地層面が波打っている事がわかります。その凸凹が堆積時のものか、その後の変動で出来たものか考える必要がありますが、こゝでは前者です。又数本の断層が見られます。

⑥層内の断層を見よう

灰青色で粘板岩の小片をもつ部分的に礫質な砂岩が泥岩を夾みながら発達する。ここでは、層内の断層が見られます。又、砂岩層の下面が一部たれ下った所があります。こゝだけ堆積の時におし出されたのです。このようなものを、ロードキャストと云います。このような断層や突起がどうやって作られたのか、自分なりに観察を通して調べるのも楽しいことです。いずれも堆積時の形成です。

かみすき牧場への入口や⑤から⑥への途中の崖くずれが多く、地層が破碎されている所は、多くは断層が通っている所ですから、注意したいものです。

⑦化石を採集しよう

2 m位の厚さの乱れて層内褶曲をしたようなこの層は、全体に炭質物が多く、時にはうすい石炭を夾んでいきます。(図3)

この砂岩や泥岩には、主として植物の化石が豊富に含まれていて、特に砂岩中には茎にあたる部分も見られ、この化石が原因で地層の乱れを作っていると思われまします。化石は多種にわたりシダや被子植物の一部は炭化され良質の石炭となり、戦争中は和平で炭坑として掘り出されたこともあるといひます。

⑧不整合を見よう

土沢に堰堤がのび、その対岸に大きな崖が見え、地層が乱れています。その崖の上手に10 m位の厚さで風吹火山の噴出物が不整合に重なるのが見られます。

⑨残るのは何か

中植橋の上から水面を眺めると、水の侵食に対して強い砂岩などは残され、弱い泥質岩

図2

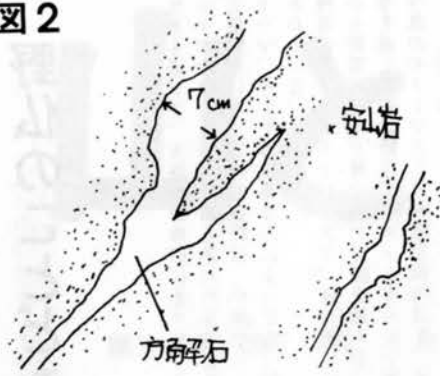


写真2

などはけずられています。又泥質岩でも残る所は硅質の所です。

又、このような場所では、橋の上からクリノメーターで地層の走向傾斜を測ることができます。N.50°W. 60°SWです。

⑩石炭を掘ろう

北股橋にかゝる手前に見事な崖が見られます。この露頭の下部に、良質の1 m幅の片状の石炭層が、砂岩・泥岩の互層中に夾まれて存在します。特に炭質の部分は片状にすべり面をもつことから、堆積後の地塊運動のげしさが考えられることは、②と同様です。この上部に重なる泥岩は、炭質で植物化石を多産します。その一部分には黄鉄鉱の結晶が見られ又方解石の細脈によって貫ぬかれています所も見られます。地層はN.80°W. 30°Sの走向傾斜を示し、上部になると塊状の砂岩に移ってゆきます。

⑪貝の化石を採集しよう

この場所は両側が崖になつていて、採集には充分注意が必要です。道上の崖の中腹に灰色・暗灰色の砂岩をもつ泥岩との互層が分布して、この互層の中の砂質の泥岩中に化石がありますが、この崖は危険なので、道路端におちて来たものから拾うのがよい。一見虫が喰つたような、や、片状の泥岩中にシジミ等、貝類の化石が発見できます。この化石は保存はあまりよくないが、ままとつ

て産出します。この外茨畑から沢入にかけての同質の泥岩には化石が含まれているものが多い。

⑫岩脈をみよう

草つきの土手の中に、幅5 m位で安山岩が来馬層を貫いて分布しています。⑫では貫入する時に来馬層の泥岩に多少の熱変質をあたえた結果、その接触部がたかくなつていいます。然し⑫では来馬層が破碎された感じの場所ので接触変質はわかりません。

⑬風吹岳の溶岩を採集しよう

道路の端に5 m位の灰白色の斜長石と同じ大きさの黒っぽい角閃石を含んだや、粗粒の安山岩が、火山噴出物を含む崖錐中に露出しています。これは⑧で見られるものと同じもので、輝石、角閃石安山岩と呼ばれています。

⑭蛇紋岩を採集しよう

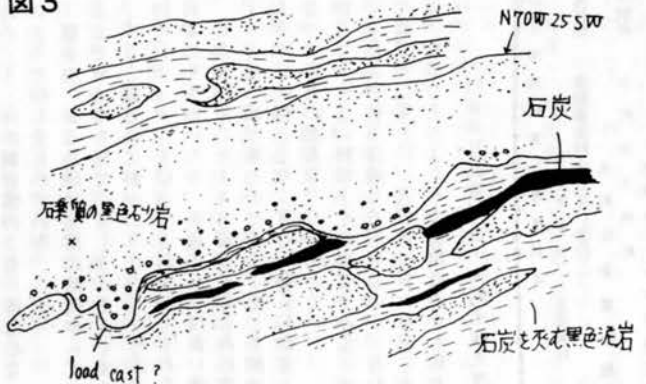
北安曇では各地で蛇紋岩が採集できますが、道路端で自由な大きさのものが採集できるのは、こゝです。一般に優黒色、緑黒色、黄緑色など種々の色を呈し、片状のものが多く一部は滑石化や石綿化したものがあり、光沢をもつた滑面に囲まれたものが多い。雨のあとなど美しい肌を見せる岩石であり、採集して研磨するのも又楽しいものです。この蛇紋岩が貫入している所は湯原部落北方のスノーセツトの所で見られます。その関係は②と同じです。

これ以外にこの附近で知られている岩体として、石坂地区の姫川左岸に分布する、石坂流紋岩があります。この岩石は灰白色の岩体の中に六角形の自形をした黒雲母を含んでいるのですぐわかります。年代測定の結果K-Ar法で5800万年前の噴出とのことです。又姫川左岸の崖では化石も豊かで以上の関係がよく観察できますが、夏はマムシなど居るので注意して下さい。

参考

今までに公表されている北安曇郡内の地質見学ルートは次の通りです。

図3



- ア、北安曇郡誌 第一巻
- ・高瀬川・横谷部
- ・金熊川流域
- ・常光寺・相川
- ・相導寺・登波離橋
- ・北小谷・横川
- イ、地質見学の旅(信教出版) P 109 ~ 110 P
- ・姫川・土谷川・奉納
- ・番場・日道
- ・平間・大久保・屋太郎・青木・真木
- ・南小谷
- ・姫川ダム・青鬼・松尾
- ・姫川・入の沢・柳沢峠
- ・白馬・ワラビ平・幸田・長峰・柳沢峠

(大町第一中学校)

野仏の「じぶん」も

西沢 要

松本を過ぎて、大糸線の車窓に北アルプスの山々が次第に近づいて来るあたりからここを安曇野という。この安曇野は、小説やテレビドラマ、そして写真集などによって広く紹介されている。

残雪の北アルプスをバックに、緑の美しい春から新雪の峰々が輝く冬の田園風景まで、四季を通して安曇野は、ロマンを求めめる小説や写真のモチーフとして最適な風物詩を、そこに引き出している。

ところで安曇野は、道祖神や野仏の宝庫でもある。多くの歴史研究や民俗学者の先生方の貴重な資料として、これまでもそれぞれ別の型で紹介されてきた。さらに最近では、テレビドラマに登場したことから、都会の若者たちの間でもブームを呼び、サイクリングな

どで訪ずれるなど、これまでに見向きもされなかつた路傍の名もない石仏が脚光を浴び、観光資源の一つにさえ数えられるようになってきた。

豊科、穂高、有明などの安曇野の南部に点在する道祖神や野仏の姿は、あたりの長閑かな田園風景とあいまって、たしかに都会の若者たちの人気を集める雰囲気をももたらしている。

私がアマチュア、カメラマンを気取って、大町周辺から年ごとに消えてゆく萱葺屋根の民家を追って久しいが、八坂、美麻、白馬、小谷へと足を踏み入れて行くうちに、行くところ何処でも必ずといっていいほど野仏や道祖神との巡り合いがあった。それは、のどかな安曇野の南部地方での巡り合いとは違つて、



夕暮の石仏

あたりの山々が、おおいかがぶさるように迫つて来る谷合いの小さな集落であり、細い帯のような空に雨雲が重くたれこめる廃村への入口であり、葉の降りしきるけもの道のよ

求めるには、観光開発の届かない。それも過疎化の波に洗われそうなる山深い村落や離村した小さな村に行くより方法がない。そのため自然に、私と野仏の巡り合いは人里離れた場所となつた。

車を降り捨て、ようやくたどりついた萱葺屋根のある村、そしてそこにひっそりとたたずむ野仏や道祖神の姿は、そこに住む人々の暮らしや人柄を物語るしてくれる。

そのかみの日、村中の信仰の対象として講や祭が開かれ、五穀豊稔、家内安全などの催事が行われたのだろう。時には苦しい暮らしの娯楽の一つとしての酒宴が夜を徹して催されもしたのだろう。そして、これらの野仏の祭りをとおして、村の結束がはかられ現代流にいう互助の精神や仲間づくりができていたの

のであろう。八坂村の山深い村を尋ねた秋の日、そこで出合った老婆は、昔の観音講、二十三夜講などの話をしてくれた。その言葉の端々には失われてゆくものへの惜別の悲哀といつたようなものがあった。「二十三夜塔も道祖神様も残つてはいるが、誰も昔のように三夜講も道祖神のお祭もする者がいなくなつたのう」——その一言が、私にずしりと重い云い難いものを感じさせた。

廃村となつた美麻村高地部落には、たつた一つの道祖神があった。長い風雪にさらされて

すでにその容姿もさだかではないが、誰が造つてあげたのか板を打ちつけた粗末な風雪除けがしてあつた。きつと村を捨てたお年寄りが、置き去りにする石仏へのせめてもの償いと造つたものだろう。夏草の生い茂る草いきれの中で、その石仏は暑さをじつと耐えているようであつた。

雨飾の山塊が急勾配に陥込んで来る小谷のここにも、住む人もなくなつた部落があつた。萱葺屋根もすでに崩れ落ち、荒涼とした光景だけが残されている。聞こえるものは、深い谷川の音だけであつた。その叢の中に全く識別できない小さな野仏があつた。孟蘭盆に

も訪ずれた村人が供えたであろう一握の花が、すでに色褪せていた。この小さな野仏もまたこの部落の栄枯盛衰をじつと見つめて来たのだろう。そして、やがて訪ずれる人もなく萱葺屋根が崩れ、朽ち果てるように土に埋もれることであらう。その帰り道で一緒になつた年老いた夫婦が「あつちが地藏峠、向うが大網峠あそこにも石仏がある」と教えてくれた。それは、安曇野のさい果てであり、旧千国街道が糸魚川へとつづく国境の峠であつた。

千国街道沿いには、数百体に余る野仏や観音像があるといわれる。葛葉峠の野仏には、雪椿の紅の花びらが散つていたし、親坂を登りつめるあたりには、二体の馬頭観音が倒れ半ば土に埋れていた。氷雨の降りしきる佐野坂峠の三十三体の観音像のうち一体は心ない人によって持ち去られていた。

「観音様、あなた様は文政の時代からずっとここで世の中を見ていらしたんですよ……」すると観音様は静かにうなづくとそんな気持でシャッターを切る」と話をしてくれた写真家の先生がいたが、街道の石仏は長い歲月、ここを往來した人々の喜びや悲しみの姿をずつと見つめて来たのだから。そして旅ゆく人々の心の糧となり、貧しい暮らしの支えとなつて来たのだから。

訪なう人もない野仏——その容姿やみ姿には高い芸術品の香りは感じる術もないが、苦むした眉間や口もとに、人の世の哀れを感じるの、私のひとりよりがちな感傷なのかも知れない。(大町青年写真愛好会・大町市観光課)

山と博物館 第21巻 第10号
一九七六年十月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL(026)221-1111
大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町 大木印刷部
大木タイムス印刷部
定価 年額 八〇〇円(送料共)(送料共)(送料共)
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)